



International Symposium on Non-Equilibrium Soft Matter 2010 報告

A02 班 好村 滋行

2010年8月17～20日に、特定領域研究「ソフトマター物理」が主催する International Symposium on Non-Equilibrium Soft Matter 2010 が奈良県新公会堂で開催された。今年の本特定領域研究の最終年度であるため、これまで4年間にわたって挙げてきた研究成果を、海外に向けて発信することが主な目的である。それと同時に、海外からも非平衡ソフトマターに関わる著名な研究者を招待し、積極的な研究交流を行うことが計画された。シンポジウムには全体で218名の参加登録があり、そのうち42名は海外からの参加であった。海外参加者の内訳も中国、台湾、韓国、イランなどのアジア諸国や、イギリス、ドイツ、フランスなどのヨーロッパ諸国、アメリカ、オーストラリアなど幅広く分布していた。全体のプログラムの詳細はホームページを参照していただきたいが、24件の招待講演者（海外からは11名）による口頭発表と2回のポスターセッションで構成された。口頭発表は本物の能舞台で行われたため、特に外国人にとってはユニークな体験であったと思われる。ポスター発表は全部で157件あった。また、3日目の午後には法隆寺へのエクスカージョン、夜にはホテル日航奈良でバンケットが開催された。準備も含めて無事に4日間の日程を終えることができ、主催者の一人としてひとまずほっとしているところである。

本国際シンポジウムのもう一つの特徴は、シンポジウムの前後の週に、東京大学・物性研究所において、ソフトマターに関連する2回の滞在型ワークショップを開催したことである（第1週：8月9～13日「Structural Rheology」、第2週：8月23～27日「Biomembranes and Vesicles」）。奈良での国際シンポジウムとの性格の違いを明確にするため、物性研での滞在型ワークショップでは研究テーマをシャープに限定した。また、8月1～6日には北海道大学において 5th Pacific Rim Conference on Rheology (PRCR-5)も開催されたため、結果として8月の全ての週にソフトマター関連の行事が企画されたことになり、2010年8月は文字通り日本における「ソフトマターの月」となった。外国人研究者の中には、個人の興味に応じて複数の会議に参加して下さった方も多数いて、様々な形で研究交流が深められた。

口頭発表の一つ一つを挙げてここで紹介することは、敢えてしないことにする。それぞれの発表要旨もホームページに掲載されているので、興味のある方は是非、そちらをご覧ください。基本的に、本特定領域研究の4つの班から顕著な研究成果が紹介されたのに加えて、「非平衡」と「生体膜」をキーワードとした講演が行われた。それぞれの発表はもちろん独立した研究であるが、お互いに有機的に関連しており、全体として「構造」や「輸送」などの概念でまとめられるストーリーが自然と浮び上がってきた。このような大きな流れは、そもそも本特定領域の申請時に5年間の研究目的として掲げられたものであり、その目標に向かって、本特定領域が着実に研究成果を挙げてきたことによる。口頭発表を個別に紹介しないもう一つの理由は、157件のポスター発表のレベルが非常に高く、口頭発表だけを紹介することは全体のバランスを欠くからである。ポスター発表のレベルが高水準だったことは、複数の外国人研究者からコメントとして頂戴している。むしろ157件のポスター発表こそが、本特定領域

研究の研究成果のコアを形成していると考えるのが妥当であろう。もちろん、全てのポスター発表がメンバーによるものではなかったが、それらを含む形で国内外に相乗効果を生んだことも、本特定領域研究の影響と言えるだろう。口頭発表とポスター発表を含めた本シンポジウムの開催によって、日本のソフトマター研究の存在感を世界に対して示すことができたと考えられる。また、今回の国際シンポジウムでは若い研究者の参加も目立った。長期的に彼らが何らかの形で研究につながるきっかけやチャンスを得てくれていることを期待する。

個人的に印象に残ったことが一つある。実は、今回の一般参加者の中に若いイランの研究者が数名含まれていた。その中の2名は、前述の8月のいくつかの会議に出席するつもりでいたが、直前になってビザが発行されず、一旦は来日をキャンセルせざるを得なくなった。しかし、最終的に遅れてビザが発行されてから当初の予定を変更して、シンポジウムなどに出席してくれた。彼らは「非平衡ソフトマター」という分野に特別強い関心を寄せており、様々な困難に対してひるむことなく、目的を達成しようとする強い意志をもっていることに私は感銘を受けた。国家の体制や宗教、慣習などが異なっているにもかかわらず、自然科学では共通の価値観をもち得ることを改めて認識した。これはやはり素晴らしいことである。その後、彼らから受け取ったメールによると、今でもシンポジウムは強く印象に残っているそうである。私にとっても、若いイラン人の研究者と知り合いになったことは、嬉しいことの一つであった。

このシンポジウムの内容に関する企画は Organizing Committee が行ったが、シンポジウムの現場の運営は16名の Local Committee メンバーが担当した。彼らの献身的な努力と見事なチームワークのおかげで、シンポジウムを無事に終えることができた点は強調しておく必要があるだろう。改めて感謝の意を述べたい。運営に関わった若手研究者にとっては、将来につながる経験となるだろう。

皆様もご存知の通り、今年の夏はとにかく暑かった。私にとっては、さらに熱い1ヶ月であったが、終わってみるととても楽しかったというのが正直な感想である。クールダウンして、次のステップを思案しているところである。

